

c-ċ, g-ġ の 問 題 (I)

最 上 雄 文

緒 言

近時、日本では古い英語の学習や研究は頓に盛んとなる傾向である。主として高等学校の生徒用と見られる英和中辞典にも〔OE〕,〔ME〕等の記載(語源を示す箇所)が現われるに至った。「OE 及び ME の研究は労多くして効少い」などと言っている時代は去ったかの観がある。これには様々な原因があるが、一つには大学の数が飛躍的に増加して、いわゆる英語研究にたずさわる研究者人口もそれだけ殖えたためと言える。古い英語の研究に従事することのできる人手が以前より豊富になったのである。とは言え、古い英語が人々の身近なものとなるにはまだ障害が多い。OE 用入門教科書、辞典類の発達は近代英語用のそれとは較べものにならない位遅れている。日本ではまだ一冊の辞典も公にされていない始末である。外国の‘Concise’とか‘Student’s’とか銘うった辞典を引いても、第一、発音からして示してない。当時の発音は推定によるしかないとか、学説上での定説がないとか、発音を示さない理由には幾つか有るのであろうが、推定の音でもよいから示すことが望ましい、これが実現するだけでも大衆化への道を大きく前進したこととなろう。現存する様々な写本から、一定の字体、spelling を統一的に定めることは確かに困難ではある。しかし、とにかく卑近なところで例を挙げるならば、*Sweet's Anglo-Saxon Reader* の如き(或はそれに類する幾つかの)先人の優れた text 上の業績があるのである。先ず、この様な text を学習する際に助けとなるべき辞書が整備されなければならない。それには、各語について、その syllabification と国際音声符号による発音の表示はどうしても実現してもらう必要がある。

以下、OE の語の音価表示に関して、問題点のうち、c 及び g にかかわるところを取り扱う。

§ 1. c, g との出会い

Ælfræd kyning hāteð grētan Wærferð biscep his wordum luflice ond frēondlice.
(アルフレッド王は私に命じました。ウェーフェルス僧正を迎えるに当り王の歓待の辞を心から親しく伝えてくれるようにと。)

これは *St Gregory's Pastoral Care* (9 世紀)の序文の冒頭である。アルフレッド王(849—901) ならばこれを読むのに恐らく [ˈælvred ˈkynɪŋ(g) ˈhɑːtəθ ˈgrɛtan ˈwærverθ ˈbɪʃep his ˈwɔrdum ˈlʊvliʃe ond frɛndliʃe] と発音したであろうということが John W. Clark の書物に見える (*Early English* 57頁)。

ここで、*kyning*, *biscep*, *luflice* 及び *frēondlice* に注目してみよう。知らない者なら、それぞれ [ˈkainɪŋ], [ˈbɪsɛp], [ˈlɑflais], [ˈfriɛndlais] と読みかねないと Clark

は指摘している。ところがその中にある *ng*, *sc*, *c* は実はそれぞれ [ŋ], [ʃ], [tʃ] であることがうかがえる。

このように音声転写した資料を探してみると、この外に次のようなものが見出される。*Beowulf* の冒頭の句が 1 行から 11 行まで (Quirk and Wrenn: *An Old English Grammar* 17 頁) ; *Luke* 伝第 10 章 30 節から 35 節まで (S. Moore: *Historical Outlines of English Sounds and Inflections* 21 頁) ; *Matthew* 伝第 5 章 9 節から 13 節, 第 7 章 24 節から, 27 節, 第 9 章 1 節から 7 節, 第 13 章 3 節から 8 節まで (市河三喜: 「古代中世英語初歩」 54 頁~60 頁)。

これらの転写の中から *c*, *g* の spelling を含む語をぬき出してみると次の様なリストが得られる。(上記 *Pastoral Care* 中のものも含む。) 各語にはそれぞれ転写者の名前を書き入れておいたが、このうち市河名及び Moore 名の語は、語自体の spelling 上でもある種の工夫 (dot 様式) が施されている。又、音声符号の組織にもそれぞれ若干の相違がある。

- ādrūgodon** [ɑ:dru:godon] (市河)
- āgreat** [ɑ:ljæ:æt] (Moore)
- āghwylc** [æ:jhwyltʃ] (Quirk)
- ælc** [ɛ:ltʃ] (市河)
- becōm** [be'ko:m] (Moore)
- Begiem** [be'ji:əm] (Moore)
- biscep** ['bɪʃep] (Clark)
- bismorspræce** [bizmorspræ:tʃe] (市河)
- bōceras** [bo:keras] (市河)
- ceastre** [tʃæstre] (市河)
- cōm** [ko:m] (市河)
- cōmom** [ko:mon] (市河)
- costnunge** [kostnunge] (市河)
- cume** [kumə] (Moore)
- cwædon** [kwæ:don] (市河)
- cwæð** [kwæθ] (市河, Moore)
- cweðenne** [kweðnne] (市河)
- cyning** [kyning] (Quirk)
- dæg** [dæje] (Moore)
- diacon** [di:akɔn] (Moore)
- dysigan** [dyzigan] (市河)
- ēac** [æ:ək] (Moore)
- ēaðelicre** [e:əðeli:tʃre] (市河)
- egsode** [ɛjsɔdə] (Quirk)
- fēasceaft** [fēæfæft] (Quirk)
- forġief** [forjief] (市河)
- forġielde** [fɔr'jældɛ] (Moore)
- forscruncon** [forʃrunkon] (市河)

- frēondlice** [freɒndlitʃe] (Clark)
fuglas [fuglas] (市河)
gā [gɑ:] (市河)
gang [gɑŋg] (市河)
Gār-Dena [gɑ:rdena] (Quirk)
ġē [je:] (市河)
geār-dagum [jɑ:rdawum] (Quirk)
gebād [jəbɑ:d] (Quirk)
ġebyrede [je'byrɛde] (Moore)
ġedæġhwāmlican [jedæjhwa:mlikan] (市河)
ġedēst [je'de:st] (Moore)
gefrūnon [jəfru:nɒn] (Quirk)
ġehālġod [jehɑ:lɡod] (市河)
ġehierþ [jehi:erθ] (市河)
ġelæd [jele:d] (市河)
ġelædde [je'læ:de:] (Moore)
ġelēafan [jele:əvan] (市河)
ġelic [jeli:tʃ] (市河)
ġeliefe [jeli:ve] (市河)
ġenēalæhte [je'næ:əlæ:xtɛ] (Moore)
ġeseah [jezɛəx] (市河) [je'sæəx] (Moore)
ġetimbrod [jetimbrod] (市河)
ġeþanc [jeθaŋk] (市河)
ġeweorðe [jeweorðe] (市河)
gōd [go:d] (Quirk)
gōde [go:de] (市河)
gomban [gɒmban] (Quirk)
grētan [ˈɡretan] (Clark)
gyldan [jyldan] (Quirk)
gyltas [gyltas] (市河)
gyltendum [gyltendum] (市河)
Hiericho [hɛrɪkɔ] (Moore)
hrædlice [hrædli:tʃe] (市河)
iċ [ɪtʃ] (Moore)
ilcan [ɪlkan] (Moore)
kyning [ˈkynɪŋ] (Clark)
lācnode [lɑ:knɔde] (Moore)
læce [læ:tʃe] (Moore)
læcehūs [læ:tʃehu:s] (Moore)
liċġende [liddʒende] (市河)
luflīce [ˈlʊvli:tʃe] (Clark)

mægþum [mæ:ðum] (Quirk)
micel [mitʃel] (市河)
micle [mitʃle] (市河)
monegum [mɒnəjum] (Quirk)
oferseglode [oversejlode] (市河)
peningas [penɪŋas] (Moore)
reġen [rejen] (市河)
rice [ri:tʃe] (市河)
sācerd [sa:kərd] (Moore)
Samaritanisc [samaritanɪs] (Moore)
Samcwicne [samkwɪkne] (Moore)
sandceosol [sandtʃeozol] (市河)
scaðan [ʃaðan] (Moore)
sceaþena [ʃaðəna] (Quirk)
scēfing [ʃe:viŋ] (Quirk)
scīp [ʃip] (市河)
scolde [ʃoldə] (Quirk)
scyld [ʃyld] (Quirk)
siextigfealdne [siekstɪjfealdne] (市河)
sōðlice [so:θli:tʃe] (市河)
spricþ [spritʃθ] (市河)
sprungenre [sprungenre] (市河)
sprungon [sprungon] (市河)
tintregodon [tɪntreɣɔðɒn] (Moore)
tōbecume [to:bekúme] (市河)
tōdæg [to:dæj] (市河)
twēġen [tw:jen] (Moore)
þence [θentʃe] (市河)
þeod-cyninga [θeədkiŋɪŋa] (Quirk)
þritigfealdne [θri:tɪjfealdne] (市河)
weg [wej] (市河)
wege [weje] (Moore)
wolcnum [wɒlknum] (Quirk)

§ 2. 問 題 点

以上のリストから次のことがわかる。即ち, *c* は [k] の音価もあり, [tʃ] の音価もある (例: *cōm*, *þence*)。又, *g* には [g], [ɣ], [w], [j] 等の音価がある (例: *gā*, *geār-dagum*, *tintregodon*, *wege*)。 *sc* は [ʃ] の音価 (例: *scyld*) であり, *ng* は [ŋ] (例: *sprungon*) であり, *cg* は [ddʒ] (例: *licgende*) である。

転写されている分量が相当に歴大であるなら, それらを一語ずつアルファベット順に並べたリストを作製するだけで発音辞典に近いものができよう。しかしここに得られた分量

は甚だ少い。偶然出会った或る語の音を知る手がかりとしては、このリストは貧弱に過ぎる。出会った *c*, *g* が [k] の音価を持つのか [tʃ] であるのか、或は [g] なのか、それとも [ɣ], [w], [j] なのか——それを判定する条項なり基準なりが欲しいものである。

諸種の文法書に、この点の基本原則が説かれている場合が多いことは確かである。しかし、例えば語の中腹部であって、*g* が後母音の中間に来たとき [ɣ] (*g* was sounded as in German *sagen* medially between back vowels—Sweet), 前母音の中間で [j] (*g* has the front or palatal sound medially between front vowels—Moore) と説かれているのはよいとして、さて「前母音 + *g* + 後母音」, 「後母音 + *g* + 前母音」の場合 (*nigon*, *āgen*) はどうか? ということになるかと判断に窮してしまふ。まして、「後母音の後の *g* は [ɣ] なり」(after back vowels, it had the value of the velar fricative [ɣ]—Quirk) という記述や、「*i*, *ē* の前の *g* は [j] なり」(*g* had a sound like Mn.E *y* in *yet* medially before *i*, *ē*—Sweet) という記述があると、「後母音 + *g* + *i*, *e*」(*magister*) の分布に出会った場合は如何ともし難くなるのである。それに「語によっては」(in some words) とか、「時として」(sometimes) という言い方が出ることは甚だ明解を欠く。

そこで、もっと行き届いた、きめの細かい基準条項を定める必要が出て来る。どの程度の成果を収めたかは別として、以下の作業はその様な試みの一環として行ったものである。

〔注〕

g の音価の中で、[w] があったが、*geīr-dagum* のような場合に [ja:rdawum] と発音する必要はないのであって、[—dayum] でよい。それは *dragan* を [drawan] と言う必要がなく、*boga* を [bowa] という必要がないのとおなじである。それぞれ [druyan], [boya] でよい。この点、Quirk & Wrenn の *An Old English Grammar* 16頁参照。Moore の意見では [ɣ] 音で出すのが困難な人は [g] で代用すればよいと言っている (*Elements* 14頁脚註)。

§ 3. す じ み ち

先にも触れた通り、音声転写のなされている資料——“音声事実、実際例に相当すべきもの”——が充分にあれば、それを分析するだけで一応の基準が帰納的に得られるであろう。しかしそれだけの資料はない。そこで、できるだけ多くの語をあつめて、文法書の基準条項に一つ一つたんに照合して、基準を精密化し、足らざるを補って行く方法を取って行きたい。しかし、基準を確かめるにせよ、仮説を験すにせよ「正解」——“事実”——が解っていなければならない。この音声“事実”に相当すべき資料として利用できるものに、次の様なものがある。

(1) 市河三喜「古代中世英語初歩」

この中にある text, glossary が有用である。[k] 音と区別するため、[tʃ] 音の場合の *c* には上に・(dot) を付けて *ċ* としてある。同様にして、[g] 音及び [ɣ] 音と区別するため、[j] 音の場合の *g* を *ġ* としている。(*g* は同一文字で [g] も [ɣ] も表わしている。音声転写の場合も [g] を用いてこれら両音を兼ねさせている。) 又、*ċġ* で [ddʒ] を示している。

(2) *Sweet's Anglo-Saxon Primer* [*Primer*]

この中にある text, glossary も前項のものと同様、甚だ有用である。やはり dot 様式

により区別が施されている。 $c \rightarrow [k]$, $\acute{c} \rightarrow [tʃ]$, $g \rightarrow [g]$ $[ɣ]$, $\acute{g} \rightarrow [j]$, $n\acute{g} \rightarrow [ŋdʒ]$, $cg \rightarrow [ddʒ]$ 。又、接辞類と stem との間に区切りの印を付けている(例: $\acute{g}e\text{--}n\acute{o}g$) ところも大きな特徴である。

(3) S.Moore & T.A.Knott: *The Elements of Old English* [Elements]

この中に収められた text, glossary も前二項のものと同様、甚だ有用である。ここにおいても dot 様式により区別が施されている。 $c \rightarrow [k]$, $\acute{c} \rightarrow [tʃ]$, $g \rightarrow [g]$, $\acute{g} \rightarrow [j]$ 。

(4) Sweet: *A New English Grammar* [NEG]

この中で OE に言及があるときは、dot 様式が用いられている。 $n\acute{g} \rightarrow [ŋdʒ]$, $\acute{c}\acute{g} \rightarrow [dʒ]$ 。

(5) A. Campbell: *Old English Grammar*

本文中でも、index においても、一貫して dot 様式がとられている。

(6) B.Mitchell: *A Guide to Old English*

これも dot 様式による記述が行われている。

(7) C.T.Onions: *The Oxford Dictionary of English Etymology*

OE 形態に言及があるときは、dot 様式や acute accent (') 様式で書かれている。 $\acute{g} \rightarrow [j]$, $\acute{c} \rightarrow [tʃ]$, $s\acute{c} \rightarrow [ʃ]$, $\acute{c}g \rightarrow [dʒ]$

(8) H.C.Wyld: *The Universal Dictionary of the English Language* [UED]

OE 形態に言及があるときは、dot 様式で書かれている。

(9) J.B.Bessinger: *A Short Dictionary of Anglo-Saxon Poetry*

この辞書は小冊子で収容語彙も多くはないが、発音を知る上で大へん貴重である。 $[k]$ は c のままで、 $[tʃ]$ は \acute{c} して表わされている ($\acute{c}iri\acute{c}e$)。又、 \acute{g} で $[dʒ]$ を表わしている ($feng\acute{g}$)。但し、 cg の spelling のきとは $c\acute{g}$ としていない (発音は $[dʒ]$ である)。 $[j]$ は 3 という文字で表わしてある。 $[g]$, $[ɣ]$ は g である。

(10) J.F.Madden & F.P.Magoun: *A Grouped Frequency word-list of Anglo-Saxon Poetry*

これは収容語彙も少いし、全体的には、アルファベット順の配列でもない。しかし、前項のものと殆ど同じ様式の文字で表記されている。

さて、検討の対象として取り上げる OE 語は、多い程よい。できるならば、 c , g の文字を含む知り得るすべての語で実験すればよい。しかし、本稿ではその余裕がないので極く限られた語彙を素材に用いる。この語彙材料は約 600 語に及ぶものであるが、主として先程来挙げた書物から採取した。これは、そこに出ている語が音声事実相当のものであるが故にではなく、あくまでも、確かめ、験めす際の便利に依ったものである。従って最初に検討する場合は、いずれも音価不明のものとして当って見るのである。即ち・も'も取りはずし、 3 は g に還元して観察する。

この 600 語は、上記のすべての書に出る c , g 含有語を網羅しているわけではない。主として *Anglo-Saxon Primer* にある語が中心となっている。その書の語彙だけは少なくとも、極力網羅することに努めた。それに、*The Elements of Old English* 中のものその他を無差別に加えた。基本語彙選定というような性質のものでないから、ここに採取した語の採り方には何ら厳密な科学的乃至統計学上の基準があるわけではない。取り扱いの可能な範囲でなるべく多くの語を採り、 c , g の分布状況の様々なケースが少しでも採りこ

ばれぬことを願った。その願いはかなり叶っている見込みである。一語の中に2つ以上の分布がみられる語もあるので、実際に検討を加えた分布ケースは延べ数にして700件近くに達している。

基準条項の中には「語或は音節の末において」(finally, in word or syllable,...)という言いまわしが出るので、本当は「音節」の切れ目を知る必要がある。しかし、或る語が幾音節から成り立っているかの見当はついても、その一々の境い目が、どこであるかを俄かに適確に断定することは常に容易と限らない。従って分節は一応省くことにした。*Primer* は、語中に切れ目を入れている場合が多いが、それは完全な syllabification を意味していると思われない。なぜならば、*beorgan* にしても、*ċiepend* にしても一音節と考えられないのに途中で切れ目を設けてないからである。Bosworth & Toller の *An Anglo-Saxon Dictionary* を見ると、接頭辞、接尾辞に類するもののつなぎ目で切れ目を設けてある (*ge-cwid-rædden*)。(このことは Sweet の *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon* や、*Primer* の glossary についても同様なことが言える。) 従ってその切れ目のところだけは区切って考えることにした。従って、以下「劈頭において」(initially) とか「中腹部において」(medially), 「末尾において」(finally) などと言うときは、大体この区切り毎を一つの単位と見なして述べている。*ungecynde* のような場合、頭から Bosworth の辞書を引くと *un-gecynde* としか区切っていないが、更に *gecynde* を引くと *ge-cynde* と区切っているから、全体としては *un-ge-cynde* と考える (*cynde* を引いてもそれ以上は区切っていない)。

§ 4. 分 布

c, g がどのような environment において分布しているかを分析すると次の様な諸ケースに分けられる。

c の 分 布

(A) 劈 頭

(1) c+ 前 母 音

(i) c+*ē, ĭ, ēa, ēo, io, ĭe*..... I

(ii) c+y II

(2) c+ 後 母 音 III

(3) c+ 子 音 IV

(B) 中 腹 部

(1) 前母音+c+前母音 V

(2) 前母音+c+後母音 VI

(3) 前母音+c+子 音 VII

(4) 後母音+c+前母音 VIII

(5) 後母音+c+後母音 IX

(6) 後母音+c+子 音 X

(7) 子 音+c+前母音 XI

(8) 子 音+c+後母音 XII

(9) 子 音+c+子 音 XIII

(C) 末 尾

(1) 前母音+c

(i) *i̇, ē, æ+c*XIV(ii) *ȳ, æ+c*XV

(2) 後母音+cXVI

(3) 子音+c

(i) *el, il, æl+c*XVII(ii) *ol+c*XVIII(iii) *n, r+c*XIX

(D) そ の 他

(1) *cc*(i) *æ, e, i, y+cc (+~)*XX(ii) *o+cc (+~)*XXI(2) *sc*XXII*g* の 分 布

(A) 劈 頭

(1) *g*+ 前 母 音(i) *g+ē, i̇, ēā, ēo, i̇o, i̇e*XXIII(ii) *g+y*XXIV(iii) *g+æ*XXV(2) *g*+後母音XXVI(3) *g*+子 音XXVII

(B) 中 腹 部

(1) 前母音+*g*+前母音XXVIII(2) 前母音+*g*+後母音XXIX(3) 前母音+*g*+子 音XXX(4) 後母音+*g*+前母音XXXI(5) 後母音+*g*+後母音XXXII(6) 後母音+*g*+子 音XXXIII(7) 子 音+*g*+前母音XXXIV(8) 子 音+*g*+後母音XXXV

(C) 末 尾

(1) 前母音+*g*XXXVI(2) 後母音+*g*XXXVII(3) 子 音+*g*XXXVIII

(D) そ の 他

(1) *cg*(i) 前母音+*cg*XXXIX(ii) 後母音+*cg*XIL(2) *ng*XLI

§ 5. 基準条項の吟味

各分布様式に対して、諸家の説を適用照合して吟味してみる。

I c—A—1—(i)

c の分布・劈頭・「c+ě, ĭ, ěa, ěo, ĭo, ěe」

Elements 16頁 (28節) に ċ has the front or palatal sound, that of *ch* in Modern English *chalk*: initially before *e*, *ē*, *i*, *ī*, *ea*, *ēa*, *eo*, *ēo*, *io*, *īo*, *ie*, *īe* と見える。これは *Primer* 4頁 (3節) に *c* had a sound like Mn.E. *ch* in *child* when it came before...the front vowels *ī* and *ě* と見えるのと矛盾しない。*Primer* の方で initially と限っていないが、劈頭の場合も含まれることは言うまでもない。但し、*Elements* においては unless the *e* or *ē* is the result of umlaut と注釈がある。*Primer* でも except for the special cases (例えば *cēne* における *c* は [k]) と言っているのは、このところを指したものと思われる。

従って、*c*+*ě* に出会ったとき、それが [tʃe, tʃe:] であるかも知れないし、[ke, ke:] であるかも知れないことになる。であるから *c*+*ě* は一応除いて、*ci-*, *cī-*, *cea-*, *cēa-*, *ceo-*, *cēo-*, *cio-*, *cīo-*, *cie-*, *cīe-* となっているときは *c* [tʃ] ときめる。これを実例に照合してみると例外なくあてはまるのである。即ち *ci-*, *cī-* その他で [ki-, ki:-...] である例にぶつからなかった。これでこの項の約8割近くの例が片付く。残った例即ち、一応除いておいた *cě-* を吟味するとどうなるであろうか。

cēne の *ē* が umlaut の結果であることは、CGem (Common Germanic) の形態 **kōnjaz* からうかがえる。この形態は、Onions の語源辞典や, Wyld の *UED* で *keen* の項を引けば出て来る。これによって *ē* の場所には元来後母音があったのであり、次の音節には *j* があったのであることがわかる。従ってこの *cē-* は [k:-] と判断できる。

ā-cennan 及び *cennan* の *e* が umlaut の結果であることは、**kannjan* という語形からうかがえる。これは *UED* で *ken* の項を引けばわかる。Onions 辞典でもほぼ同様である。

ān-cenned の *e* が umlaut の結果であるかどうかを判断すべき材料はない。[-ken-] かどうか不明と言わざるを得ない。

cēpan の *ē* も身元素性が不明である。*UED* で *keep* を引いても etymol. unknown と書いてある。Mod.E の *keep* (<ME *kēpe(n)*) という形態から、*c* [tʃ] ではなかったであろうと推測する外はない。

このようにして全部が明解に判断されるわけではないが、大体の傾向として *cě-* は [ke-, ke:-] であり勝ちである。

II c—A—1—(ii)

c の分布・劈頭・「c+y」

Primer 3頁に *c* had the sound of *k* before...*ȳ* と見える。これで行くと「c+y」の例は例外なくあてはまる。即ち *cy-*, *cȳ-* で [tʃy-, tʃy:-] であるものに出合わなかった。

III c—A—2

c の分布・劈頭・「c+後母音」

Primer 3頁に *c* had the sound of *k* before back vowels と見える。これを適用し

てみると例外なくあてはまった。即ち *ca-*, *cā-*, *co-*, *cō-*, *cu-*, *cū-* の類の語で [tʃa-, tʃo-, tʃu-...] というようなものには出会わなかった。

IV *c* — A — 3

c の分布・剪頭・「*c*+子音」

Primer 3 頁の終りに *c* had the sound of *k*...initially before consonants と見える。これを適用してみるとやはり、例外なくあてはまった。即ち *cl-*, *cn-*, *cr-*, *cw-* の類の語であって [tʃl-, tʃn-, tʃr-, tʃw-] というようなものには出会わなかった。

V *c* — B — 1

c の分布・中腹部・「前母音+*c*+前母音」

Primer 4 頁に *c* had a sound like Mn.E. *ch* in *child* when it came before or between the front vowels *i* and *e*, except for the special cases と見える。the special cases というのは、先程 I の項で見たように *e* の前でも *c* [k] があり得る (*cēne*) ということである。従って「*~+c+ē*」の場合は一応注意を要するが *Elements* 16 頁に但し書きなしで, *c* has the front or palatal sound, that of *ch* in Modern English *chalk* ...medially between *i* and a front vowel と見えるから「*i+c+ē*」は注意の限りではないとも言える。

「*i*, *e*, *æ+c+i*, *e*」の類の分布は, *Primer* の上の条項に合致するが「*i*, *e*, *æ+c+æ*」というような分布になると条項外のこととなる。又, *Elements* の条項では「*i+c+æ*」, 「*i*, *e*, *æ+c+i*」は ([tʃ] で) 差支えないが, 「*i*, *e*, *æ+c+ē*, *æ*」になると対象外になる。従って「*i*, *e*, *æ+c+æ*」の分布は両条項のいずれにも該当しなくなるが, 実際例ではこの分布はなかった。結局 *æcer*, *ēce*, *frēcennes*, *med·micel*, *ge·recednes*, *bismor·spræce*, *micel* だけを後まわしにして他のすべての語に [tʃ] を適用して見る。その場合, *lician*, *wician* だけがあてはまらない様である。

これの理由は明らかではない。Onions 辞典で *like* の項を見ると, CGem **likæjan*, **likōjan* の記述が見えるだけで, *lician* が [-tʃ-] であってはならない理由は見出せない。しかし, -*cian* の語で [-tʃian] の例がないとすれば, 特別に注意を払う必要がある。

æcer Primer 3 頁に *c* が [k] 音の場合について sometimes also before *e*, in words which may generally be recognized by their modern pronunciation with *k* とある。これだけを根拠にするのはいささか気がひけるようでもあるが, ME 形で *āker* であり, 近代の発音で [éikə] (*acre*) であるならば [-tʃ-] であった可能性は少いと見られる。

ece は C. Hall の *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* を見ると項末に '*eche*' という指示がある。*NED* で *eche* の項を見ると発音は示されていないが, 13世紀の頃は *ch* の綴が用いられていたことがわかる。又 O Teut. の推定形態は **aiwokjo-* であるという。

frēcen·nes は不明である。Sweet も Moore も *c* としているから, *Primer* の原則通りの適用が行われているのを知る。

med·micel, *micel* の場合も必ずしも明らかではない。Sweet, Moore, Bessinger, Campbell, Onions, Wyld いずれもこぞって [tʃ] 説をとっているから, やはり *Primer* の原則通りが適用されている。

ge·reced·nes 不明である。Sweet は原則を適用している。

結局、後廻しにした語の中では *æcer* の場合だけが [tʃ] とならない。

VI c — B — 2

c の分布・中腹部・「前母音+c+後母音」

Elements では積極的にこれにあてはまるべき条項はない。但し、c が [tʃ] になる場合に言及したところで when originally followed in Prehistoric OE by *i*, *ī*, or *j* (16 頁) とあり、例として *sēcan* を挙げてある。*Primer* 3 頁では c had the sound of *k* before...back vowels という条項がある。これを適用すると、半数以上があてはまる。但しあてはまらないものもかなり出るのである。この点、*Primer* では何も言及がないのは不思議である。*Primer* 4 頁に c が [tʃ] になる場合に触れて finally after *ī*, *ē*, *æ* と言っているが、medially で「*ē*, *æ*+c+後母音」(between *ē*, *æ* and back vowels) という条項を入れてはどうかと思う。

blæcan Mod.E の音は [bli:tʃ] (*bleach*) Germ 形態は **blaikjan* (Onions)。

ge-efen-læcan, *ġe-þwær-læcan* 不明である。

o-læcung 不明。

be-þæcan Hall 辞典の項末に '*bipeche*' の指示がある。*NED* で *bipeche* の項を見ると、発音は示されていないが、12, 3 世紀の頃は *ch* の綴が用いられていたことを知る。

ræcan ME 形は *rēchen*; WGerm 形態は **raikjan* (Onions); Germ **raikjan* (Wyld)。sēcan ME 形は *sēchen* 及び *sēken*, CGerm 形態は **sōkjan* (Onions, Wyld)。

be-tæcan, *ge-toæcan* ME 形態は *tēchen*; **tahjan* (Wyld), **taikjan* (Onions)。

かくして *Elements* にあるように、Prehistoric OE の形態を何とかさぐり得るのはせいぜい 6 割前後にとどまる。残りは審かでない。

VII c — B — 3

c の分布・中腹部・「前母音+ c +子音」

Primer 3 頁では c had the sound of *k*...initially before consonants と言っているだけである。'initially' でなければ [tʃ] であるのかどうかということは何も触れていない。

ēaðelīcre これは副詞 *ēaðelīce* [-tʃə] の比較級であるが、こういう場合は原級形の [tʃ] がそのまま生かされると考えた方が自然であろう。

frēcne この c を [tʃ] と考えているのは Campbell だけの様である。Bosworth & Toller の辞書には、同族語として O.Sax の *frókan* を挙げている。

micle, *miclum* これはいずれも *greatly*, *much* をいみする副詞である。後者は元来、形容詞 *micel* の dative から発達した。これら副詞の c が [tʃ] であるか [k] であるか断定する根拠に窮するが両方あるのではなかろうかと考えられる。

spricþ これは *sprecan* [-kən] という動詞の indicative, present, 3 人称, 単数形である。これが [-tʃθ] とならねばならない根拠があるとすれば、それは *Elements* に言う Prehistoric OE の形態を知る必要がある。しかし、不明である。「古代中世英語初歩」では [spritʃθ] と転写している (57 頁)。それならば text は *spricþ* とすべき筈であるが・が落ちてゐる。

この項の c は両方 ([k], [tʃ]) あることが多いのではなかろうか。しかし、語の絶対量はそれ程多くない。殊に語尾変化関係を除くならばそうである。

VIII c — B — 4

c の分布・中腹部・「後母音+*c*+前母音」 ([k])

これは、続く次ぎの二項と一括して考える。

IX c — B — 5

c の分布・中腹部・「後母音+*c*+後母音」 ([k])

X c — B — 6

c の分布・中腹部・「後母音+*c*+子音」 ([k])

この三項のうち、積極的な意味で適用条項があるとすれば、IX項の場合だけである。即ち *Primer* 3頁にある *c* had the sound of *k* before back vowels である。それ以外については触れるところがない。*Elements* では originally followed in Prehistoric OE by *i*, *ī*, or *j* のときは *c* は [tʃ] というのであるから、常に Prehistoric OE の形態が気になりとなる。そこで「後母音+*c*+ (前母音, 後母音, 子音)」の分布においては *c* は [k] なりと仮説して各語を検討してみるとこれが例外なくあてはまる。後の項 (XVI *c—C—2*) で触れる筈の「後母音+*c*」の分布もこの仮説で間に合うこととなろう。*ēac*, *ēacen*, *ēacnian* における *ēa* なる二重母音や, *smēocan* における *ēo* といった二重母音も *c* の前の後母音なりと見なすことにする。

XI c — B — 7

c の分布・中腹部・「子音+*c*+前母音」

この場合の子音とは *l*, *n*, *r* である。

Primer 4頁では *c* had a sound like Mn.E *ch* in *child*...in some words after *n*, *l* という条項がある。従って *l*, *n* の次では注意を払う必要がある。それでなくとも, *Elements* には originally followed in Prehistoric OE by *i*, *ī*, or *j* のときは [tʃ] だという条項があるのであるから *r+c* の場合だからといって安心してはいられない。

seolcen Primer 3頁では *c* が *ē* の前でも時として [k] であると述べ、そういう語は may generally be recognized by their modern pronunciation with *k* としている。この場合 Mod.E *silken* の発音は [sɪlkən] であるから OE 音も [k] であったと見当をつける。

be-stealcian ME の形は *stalken* であり, Prehistoric では **stalkōjan* (Onions) であった。V項で見たように、一般に *-cian* が [-tʃian] となる例に出会わないとすれば、この *c* も [k] となる公算が大である。

swelce (adv.) ME の形は *swich*, *swech*, *swu(l)ch* 等があり (Onions, Wyld), 古いところでは earlier **swilič*, **swalič* があったという (Wyld)。恐らくは [tʃ] であったのであろう。

wolcen ME の形には *wolken*, *welken* があった。Mod.E では [wélkin] (*welkin*) の発音である。Old Saxon, Old High German における同族語は *wolcan* であったという。結局 [k] 音と見るのが恐らく自然であらう。

ðancian ME 形は *thankie(n)*, *thanke(n)* である。Mod.E では [θæŋk] (*thank*) の発音である。Old Saxon の同族語は *thankon*, Old High German のそれは *dankōn* であったという。一般に *-cian* で [-tʃian] の例が見当たらないとすれば結局、この場合も [k] 音と見るのが恐らく自然であらう。

pence これは *pencan* という動詞の indicative, present, 複数形である。本当は

pencap となる場所であるが直後に *gē* という二人称代名詞が来ると *pence* となる。ところで infinitive の *pencan* は [-tʃ-] であるので語尾変化した形態もその形を踏襲すると考えるのが自然であろう。

ærcē-biscop この *ærcē* という語はラテン語由来の語である。Sweet や Onions は [tʃ] としている。勿論 Wyld もそうしているのであるが、*UED* では特に説明を加え、Mod.E *arch-* を [āk-] と発音する場合があるのは、比較的最近になってギリシャ語から直接に借入された語があるためであるとしている。

XII c — B — 8

c の分布・中腹部・「子音+c+後母音」

この場合の子音も *l*, *n*, *r* である。従って前項の最初に述べたことは、同様にここにおいてもいい得る。

ただ「*l*+c+後母音」の場合で [tʃ] になる場合に出会わなかった。

geolca ME 形は *zolke*, Mod. E は [jouk] (*yolk*) の音である。

elcor 不明である。Sweet 及び Bessinger は [k] 音と見ている。

ilca ME 形は *ilke* である。Mod.E は [ilk] (*ilk*) の音である。Sweet, Onions, Bessinger, Campbell 等は [k] 音と見る。

ここに対象となった「*n*+c+後母音」の語は偶然他動的なものが集った。

a-cwencan ME 形は *quenchen*; Mod.E は [kwentʃ] (*quench*) の音である。古形は **kwankjan* (これは自動的な動詞 **a-cwincan* の causative である)。結局 [tʃ] と判断するのが自然の様である。

be-sencan ME まで *senchen* で残存したらしいがやがてこの他動的な動詞は減んだ。Mod.Eにある *sink* は自動的な *sincan* 系統である。上記の語に準じて [tʃ] と見なしてよいのであろう。

swencan これも *be-sencan* と同様 *swincan* (自動的) と対をなす他動的な形態であった。Mod.Eにある *swink* は *swincan* 系統である。*swencan* の方は *a-cwencan* に準じて [tʃ] と判断されよう。

pencan Wyld の見方からすると、Mod.Eにある *think* は OE *þyncan* 系統である。これは *seem* の意味であったがやがて、*þyncan* の同族語だった *pencan* からその意味 *think* を受け継いだ。*pencan* の方は廃れた。

しかし Sweet, Wyld, Onions, Bessinger, Campbell 等は *þyncan* と言えども [tʃ] であったと見ている。

ge-wyrcan ME 形は *wirch(e)*, *wyrch(e)*, *wirchen* であった (Onions, Wyld)。このまま行けば Mod.E においても [tʃ] 音であろうが、名詞形 (OE *weorc*, *werc*, *worc*, *wurc*) の影響や、種々の Old Norse 系統の動詞語形 (*virka*, *verka*, *vrka*, *verka*) の影響で [k] 音が盛んになった。

XIII c — B — 9

c の分布・中腹部・「子音+c+子音」

ごく少数の語においてこの分布が見られる。VII の項目の最初に述べたことはここでも言える。ただ、二音節以上であって、音節の切れ目ということを考えた場合、この *c* の前に境目を設け得るとするならば、この *c* は当然 “initially” に準じて扱っていいことになる。そうすれば殆ど [k] で片付く筈である。*sanct* は一音節かもしれないが、これはラテン

語由来の語であって {santʃt} となることは考えられない。

XIV c — C — 1

c の分布・末尾・「*ī, ē, æ+c*」

Primer 4 頁では *c* had a sound like Mn.E. *ch* in *child* when it came...finally after *ī, ē, æ* と言っているのである。従って大抵のものは [tʃ] で片付く。残るのは, *bæc, fæc, bræc*, 及び *cwic, wic-stow* である。

Primer 3 頁に *c* had the sound of *k*...finally after *æ* というところがあるから, これを適用すれば *bæc, fæc, bræc* も片付く。

cwic は ME 形で *quik* で, Mod.E では [kwik] (*quick*) の音である。CGerm 形態は **kwikuaz* である。第二番目の *k* の起源ははっきりしないとのことである (Onions)。いずれにしても OE において *cwicu* [kwiku] の方が寧ろより正規な形態であったかも知れない。その [u] が落ちたものであろう。とすれば [kwitʃ] とならなくてもよいであろう。しかし *-ic* に終る他の多くの語が [tʃ] だとすれば, 文語としての *cwic* を [kwitʃ] と言う人が出ないと限らない。Bessinger, Campbell はその様に読む様である。

wic-stow Sweet は *wic* 単独の場合は [tʃ] としているが, 複合語の場合は [k] としている。Onions は単独の場合も [k] としているようである。Wyld, Bessinger は少くとも単独のとき [tʃ] と見ている。複合した場合については不明である。

XV c—C—1—(ii)

c の分布・末尾・「*ȳ, æ+c*」

Primer 3 頁に *c* had the sound of *k* finally after *æ* というところがあるから, これを適用すれば *bæc, fæc, bræc* 等がすべて片付く。final after *ȳ* のときは [k] である。

XVI c — C — 2

c の分布・末尾・「後母音+c」

Primer 3 頁に, *c* had the sound of *k* when final after back vowels とあるから, これを適用して見ればよい。後母音の後の *c* は [k] らしいことは先の X の項において触れた。ここでは例外なくあてはまるのである。

XVII c—C—3—(i)

c の分布・末尾・「*el, il, æl+c*」

ælc ME 形は *each, ech*; Mod.E は [i:tʃ] (*each*) の音である。WGerm の形態は **aiwō zalikaz* (Onions) である。Germ. は **ai-galik-*, **ai-gahwalik* (Wyld) である。

æz-hwelc, ge-hwelc, hwelc CGerm の形態は **χwa-* **χwe-* **lika-* に基づく (Onions)。Old Saxon の同族語は *hwilic* であり, Old High German のそれは *hwelih*; Gothic のそれは *hwileiks* であるという (Wyld)。

swelc ME 形には *swich, swech, swuch, such, swu(l)ch* (Onions, Wyld) などがある。Mod.E. は [satʃ] (*such*) の音である。古形は earlier **swilīc*, **swalīc* であるという (Wyld)。

以上いずれの語も [tʃ] 音と考えられている様である (Sweet, Onions, Wyld, Bessinger)。

XVIII c—C—3—(ii)

c の分布・末尾・「ol+c」

folc, *folc-lic*, *land-folc* ME 形は *fōlk*; Mod.E. は [fouk] (*folk*) の音である。
CGerm の形態は **folkam* (Onions), **fulk-a* (Wyld) である。

meolc ME 形は *milk*, Mod.E. は [milk] (*milk*) の音である。CGerm の形態は **meluks* とされる (Onions)。

XIX c—C—3—(iii)

c の分布・末尾・「n, r+c」

drinc (名詞) 不明。

ge-panc, *panc* Germ の形態は **pankaz* である (Onions)。

mearc ME 形は *mark*, Mod.E. は [ma:k] (*mark*) の音。CGerm の形態は **markō* (Onions)。

ge-weorc ME 形は *werk*, *worc*, Mod.E. は [wə:k] (*work*) の音。CGerm の形態は **werkam* (Onions)。

いずれも [k] 音と見られている。

XX c—D—1—(i)

c の分布・その他・「æ, e, i, y+cc (+~)」

ge-læccan, *ā-streccan*, *reccan*, *ā-weccan*, *weccan*, *ticcen*, *stycce* 等はいずれも [ttʃ] と見られているが, *picce* は [k] と見られている (Sweet, Onions, Bessinger)。しかし Wyld はこの場合も [ttʃ] と見ていると思われる節がある (*UED*→*thick*)。

Wyld によれば *picce* は **thitch* となる筈であったろうが, 同族形態の ME *thikk* (これは恐らく Old Norse *þykkir* に由来するであろう) がとって代ったという。Campbell も [tʃ] 説と思われる。

XXI c—D—1—(ii)

c の分布・その他・「o+cc (+~)」

coccel, *locc* は単独の c の場合に準ずる→X, XVI

XXII c—D—2

c の分布・その他・「sc」

sc は概ねどの位置においても [ʃ] である。[ʃ] ではなく [sk] となる少数の借入語 (主にラテン語から入った。しかも [sk] → [ʃ] の変化が終って後に入った場合である。 *disc*, *scrin* などのもっと以前に入った) である。例えば *scōl*, *discipul*, *scutel*, *Scottas* 等がこれであるが, その他に *āscian* もそうである。*āscian* は, 元来は *ācsian* であった。後に metathesis により *āscian* となった。*sc* の次に後母音が来るとき先の *sc* が [ʃ] であることを如実に示さんがためにしばしば *e* が挿入された (*sceolde*, *sceama*)。この *e* はわたり音を表わしたとも見られる。

(次号完結)